

〔平成 23 年度 博士学位論文要旨〕

現代日本語のテアル構文の研究

言語教育研究科 日本語教育学専攻 博士後期課程 齋藤 茂

内容の要旨

0. 論文の構成

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 先行研究の概観
- 第 3 章 引用の「と」とテアルの 2 つの類型
- 第 4 章 主節のテアルの機能
- 第 5 章 従属節におけるテアルの機能
- 第 6 章 類似表現との比較でみたテアル構文の特徴
- 第 7 章 結論

1. はじめに

本論文は、現代日本語のテアル及びそのテアルが用いられたテアル構文に関する研究である。具体的には、以下の例文(1)～(4)のような、テアル及びテアルが用いられたテアル構文の統語的性質を記述するとともに、現代日本語においてテアル構文という構文が果たす役割を明らかにすることである。このテアル構文では主に他動詞が用いられているにもかかわらず、対象という意味役割を担う名詞(句)がガ格でもヲ格でも示されるという興味深い特徴がある。現代日本語では、他動詞文では対象という意味役割を担う項はヲ格で示される。しかし、テアル構文では、(1)～(4)のように対象の格表示にはガ格とヲ格とがあり、森田(1977)など先行研究ではこの対象の格表示の違いを基準に 2 つに区分し、2 つの類型がテアル構文にあるとされ、その 2 つの類型の違いは何かという観点から分析が行われている。なお、本論文ではテアルに 2 つの類型を認め、それぞれ I 型のテアル、II 型のテアルと表記し、それらが用いられた文を I 型のテアル構文、II 型のテアル構文とする。また、この類型の区別なくテアルという形式のみを指す場合には、単にテアルとし、文であれば単にテアル構文とする。

- (1) そこには次のようなことが書いてあった。

(「偽装の夜」『探偵倶楽部』)

(2) 一休さんが、「ここに何か、善阿弥さんの気になること**が**、**記してあった**。……」 (「東山御殿御庭」『仕替えられた罌』)

(3) そこには例の玉枝の孫に関わる調査結果**を記してあった**。
(「罌の中」『探偵倶楽部』)

(4) 町田が確認した物品**を**、一点ずつ**書き出してある**。 (『笑う警官』)

このテアルは、先行研究では、完了というアスペクト的意味を表す形式とされる。それら先行研究での考察では、主に主節に用いられたテアルに対して2つの種類の違いについての分析になされ、加えて受動のラレル+テイルという形式が用いられた受動表現文や存在文といった類似表現との比較もなされてきた。

しかし、先行研究のテアルが完了を表すというアスペクト的意味を表すということからだけでは、対象の格表示の違い、2つの類型にあるとされる人称制限、受動表現文や存在文との差異について十分に説明できたとは言い難い。

さらに、先行研究ではほとんど考察がなされていない従属節についても考察を加えることでテアルおよびテアル構文の包括的な研究を目指した。なお、考察にあたり、独自に作成したコーパスデータを活用し実証的な考察を行う。

2. 本論文の観点

本論文ではテアルの機能を、発話の根拠となる情報を話し手が確認したものであることを表し、テアルの2つの類型はその確認の方法の違いを表すという観点から論じ、テアルをこのように理解することで、テアル及びテアル構文の特徴をよりよく説明できることを示す。また、発話情報が確認したものであることから、テアルが広義の証拠性に関わるものであるとの観点から論じる。但し、本研究では確認した根拠、すなわち証拠があるということから、完了というアスペクト的意味は副次的に表されると考える。

また、テアルの区分に関してはテアルとラレテイルとの置き換えテストを行い、置き換え可能なⅠ型と置き換えができないⅡ型とに分類した。Ⅰ型のテアル（主に対象がガ格で示されるもの）が主節に用いられたテアル構文は、人によるある動作の結果状態であると捉えられる状態を確認して、その結果をもたらす動作が行われたと発話するものであり、Ⅱ型のテアル（主にヲ格で示されるもの）が用いられたテアル構文は、人による動作自体が行われたことを確認して述べるものであることを示した。なお、この置き換えテストは野村(1983)や原沢(2006)などがガ格・ヲ格以外のテアルの分類に用いた方法である。

3. 発話情報の根拠と確認

第3章では、引用の「と」が用いられた用例を基に、テアルが発話にあたって、

話し手が確認した情報であり、確認の方法の違いによってテアルは 2 つの類型に分かれることを論じた。具体的には、以下の例文は、置き換えテストによって 2 つに区分できるが、動作の結果を確認しているものと動作自体を確認しているものとの違いである。なお、#は文法的ではあるが、認知的意味が異なることを表す。

- (5) a. 差出人のところには、同じ文体で「明美」とだけ書いてあった。
(『模倣犯(1)』)
b. 差出人のところには、同じ文体で「明美」とだけ書かれていた。
- (6) a. 両親には祖父のマンションに泊まると言っていた。
(『世界の中心で愛をさけぶ』)
b. #両親には祖父のマンションに泊まると言われていた。

例文(5)では、「～と書いてある」などは書かれた文字を基にそのような人による動作があったとし、「～と言っている」などでは話し手がその動作を確認している場合にのみ発話が可能である。すなわち、書かれた文字という結果からそのような動作が話し手以外によって行われたとする I 型に対して、結果が存在しない「言っている」「お願いしてある」などでは、動作主以外のものが後から動作が行われたことを確認できない。従って、動作主は話し手自身、あるいは話し手自らの動作でなくともその場に居合わせ確認している場合にのみテアルを用いることができ、その場合には II 型となる。続く第 4 章では、引用以外の主節にテアルが用いられた用例についても結果がない動詞では、動作自体を確認した II 型のみが可能であり、I 型のテアルは用いることができないことを示した。

- (7) a. 絵は黒い枠で囲ってあった。(『償い』)
b. 絵は黒い枠で囲われていた。
- (8) a. 彼女の家の電話番号は、河中からきいてあった。(『水恋』)
b. #彼女の家の電話番号は、河中からきかれていた。
- (9) a. ここにもメモが貼ってあった。(『垂直の死海』)
b. ここにもメモが貼られていた。
- (10) a. わたしも自分の素性を知らせてある。
(『天然ブスと人工美人とどちらを選びますか』)
b. #わたしも自分の素性が知らされている。

さらに、先行研究では対象の格表示を基準に分類していたため、対象がガ格で示されるものとそれに準じるもの、対象がヲ格で示されるものとそれに準じるものとのわけ、前者の動作主は第三者、後者は話し手自身としていた。しかし、話し手自身が動作主であってもガ格で対象が示されるもの(9例)があることを見つけて示した。

- (11) a. 「冷蔵庫の中におかず**が入れてある**きに」 (『空の中』)
 b. # 「冷蔵庫の中におかず**が入れられている**きに」
- (12) a. 「あの水には、僻南の毒**がたっぷり入れてある**。これからあの中に入るのだ。兄の命を奪ったのと同じ毒で死ねて、さぞかし本望であろう」
 (「神国崩壊」『犯人たちの部屋』)
 b. # 「あの水には、僻南の毒**がたっぷり入れられている**。これからあの中に入るのだ。兄の命を奪ったのと同じ毒で死ねて、さぞかし本望であろう」

これは、置き換えテストによって分類したことと大量のコーパスデータを用いたことによる成果である。そのほか、従来のテアル構文の分析で取り上げられてきた、人称制限に関する分析も、結果を基にした情報か、直接確認した情報かの違いで説明ができることを論じた。また、意志性に関しても、テアルが「人の動作」とする点で意志的な動作に関してテアルが用いられるものであり、先行研究で意志性のない用例とされてきた「忘れる」や忘れるが含まれる複合動詞の用例に関しては、「忘れる」が「わざと」と共起可能であり、意志性が全くない動詞であるとは言えず、意志性に関しては無意志と意志の両方がある特殊な動詞であると言え、人である動作主自身による制御可能な人の動作であるためテアル構文に用いられるとした。なお、テアルがこのような機能を持つことに関しては、テアルだけではなく、定延(2006)ではテイルがデキゴトの観察を表すものでありエビデンシャリティを表すとし、鈴木(2004)が奄美大島の方言でのテアルがメノマエ性を表すなど同様の事例が報告されている。テアルが情報の根拠を表すということは特殊な現象ではなく、現代日本語において広くみられるものであると言える。

4. 従属節のテアル

次に、先行研究ではほとんど考察されていない従属節に用いられたテアルをも考察し、テアルの包括的な研究を目指した。その結果、対象が従属節内にある場合、主節と同様の機能、すなわち確認の方法の違いを表すが、主節とは異なりI型であってもヲ格で示される(15)。しかし、この場合にはI型のテアルは結果を確認して述べるものであるため、結果が存在しなければならない。

- (13) そこは机や金庫**が置いてあって**、一応、国松のオフィスになっていた。
 (『OUT (上)』)
- (14) 番号**を教えてある**から、きっと携帯に電話をかけてくるはずだ。
 (「比類なき神々しい瞬間」『論理学園事件帳』)
- (15) 写真**を貼ってある**のが見える。 (「探偵の使い方」『探偵倶楽部』)

一方、対象が被修飾名詞になった従属節では、テアルは主節のように確認の違

いを表すことはできず、確認した情報であることのみを表す。この点を論じたことも先行研究との違いであると言える。

(16) **巻いてある**糸も、だいぶ太そうだ。 (『水恋』)

(17) ベッドの下に**入れてあった**金~~が~~やられた。 (『重力ピエロ』)

この例文(16)では、「だいぶ太そうだ」という主節と前後の文脈から、話し手が結果を確認して述べていることがわかるが、従属節だけでは確認の方法はわからない。同様に(17)も前後の文脈がなければ動作自体を確認したかどうかはわからない。以上のように、先行研究では言及がない従属節に用いられたテアルでは、対象が被修飾名詞であるか否かでその機能が異なり、主節での機能と異なるという点を明らかにした。

5. 類似表現との比較

第6章では、本論文の観点に立つことで、先行研究で指摘されている類似表現との使い分けなども説明できることを示した。具体的には、I型のテアル構文と受動表現文及び存在文との類似性とその違いについて論じた。まず、I型のテアル構文と受動表現とは、その類似性が指摘され、両者の違いについては主に意志性の違いにあるとされてきた。このI型のテアル構文と受動表現（ラレル+テイル）との違いもI型のテアルが「人によってある動作が行われた」とすることから説明が可能である。I型のテアルが「人によってある動作が行われた」と結果を確認して述べることから、導き出される制約がI型のテアル構文にはある。そのため、自然など人以外の力によるもの、結果が必要なことから結果のない動作、さらに、継続状態の場合にはI型のテアル構文を用いることができない。それに対して、受動表現文ではそのような制約はなく用いることができる。また、ガ格だけでなく、「ニ、ニヨッテ」でも動作主を明示できない点で、受動表現文とは異なることを指摘した。これらの受動表現と異なる点があるのも、I型のテアルが結果を確認して「人によるある動作が行われた」とすることによる。

また、存在動詞アル・イルが用いられた存在文との類似性をI型のテアル構文の構造から説明を試み、動詞にテアルが後接することで場所を表すニ格名詞句が出現しやすくなること、さらに、場所を表すニ格句とが対象に先行し典型的な存在文とされる文の構造に類似すること、加えて、発話の根拠となるものが存在しなければならぬことの3点から存在文との類似性が生まれるとした。次に、存在文との違いでは、存在文が単に物の存在を表すのに対して、I型のテアル構文では、その存在の状態が「人によるある動作が行われた」結果状態であることを表すことができる点、どのような状態で存在しているかを表す点でテアル構文の存在意義があるとし、このような類似表現との比較から得られた知見も、I型の

テアルが結果の状態を確認したものであることを表すという本研究の仮説の正しさの傍証になると言える。

6. 結論

本論文は、以上述べてきたように、テアル及びテアル構文に関して、コーパスデータの実例を基に、主節だけでなく先行研究ではほとんど考察がなされていない従属節についても考察を行い、テアル及びテアル構文の包括的研究を行った。

以上の考察を通じて、テアルが発話の根拠となる情報を話し手が確認したものであることを表し、その確認の方法の違いによりテアルには2つの類型があり、広義の証拠性を表すものであると論じた。その上で、テアルが完了というアスペクト的意味を表すのは、動作が行われたことを確認したということから副次的に生じるものであると論じた。また、テアルが人による動作が行われたと表現することで、受動表現文や存在文との類似性が生じ、差異が生まれることを示した。さらには、先行研究で指摘されていない事例、すなわち、話し手が動作主の場合でも、対象の格表示がガ格になる用例の存在を指摘した。

本論文での以上の成果は、日本語学に資するものであると信じる。